

## 教科書評価を通して考える小学校「外国語」の書くことの指導と今後の課題

井草玲子

東京福祉大学 保育児童学部(池袋キャンパス)  
〒171-0022 東京都豊島区南池袋2-47-8

(2021年11月30日受付、2022年2月17日受理)

抄録：2020年4月、小学校3・4年生を対象に「外国語活動」が、5・6年生を対象に「外国語」の授業が、日本全国で開始され、2021年には中学校で「外国語」の新課程が導入され、2022年には、高校で新課程が開始される。このように日本の英語教育は著しい進展を見せている。こういった英語教育上の変化の波に乗り、前進していく際の鍵の1つが教科書評価である。そこで、本稿では、小学校5・6年生の「外国語」の指導、とりわけ、書くことの指導に焦点をあて、6冊の「外国語」の教科書評価を行い、外国語教育の現状を把握し、課題を見つけ、今後の対策を考察することを研究目的とした。その結果、小学生への学習支援の必要性がクローズアップされ、小学校教員志望者は、児童のニーズを把握し支援するためにも、自らの英語力と指導技術の向上に努めることが重要であるとの結論に至った。

(別刷請求先：井草玲子)

キーワード：教科書評価、小学校の外国語教育、書くことの指導、小学校教員養成

### 緒言

2020年4月、小学校3・4年生を対象に「外国語活動」が、5・6年生を対象に「外国語」の授業が日本全国で開始され、2021年には中学校で、2022年には高校と新しい英語の教科書の使用が開始される。このように、日本の英語教育は、これまで以上に著しい進展を見せている。この大きな流れの中で、小学校の教員を目指す学生は、日々どのような努力を積み重ねていけばよいのであろうか。英語力の向上のみならず、「外国語(英語)」という教科を小学生に教えるため指導力の向上も求められるであろう。

現在、小学校教員養成課程の学生が受講する「外国語の指導法」は必修科目であり、90分の授業が15回で構成され、コアカリキュラムに準拠し、文部科学省の新課程の認定を受けたシラバスに基づいて実施されている。科目担当者として学生が書く指導案を点検し、模擬授業を見ると、教師の立場で気づくことはたくさんある。とは言うものの現実問題としては、「外国語」と「外国語の指導法」の授業は、それぞれ15コマ、計30コマと時間の制約があり、与えられた時間内に効率よく学習し、小学校教員志望の学生の実力を向上させるには様々な工夫がある。しかもこういった学生の外国語の指導力と英語力の向上は、すぐ達成できるものではなく、教員養成課程での4年間のたゆまぬ努力と学習の成果として徐々に実を結ぶものであろう。そこで、

本稿では、小学校5・6年生の「外国語」の指導、とりわけ、書くことの指導に焦点をあて教科書評価を行い、外国語教育の現状を把握し、課題を見つけ、今後の対策を考察することを研究目的とする。

### 調査対象と方法

#### 1. 調査背景と調査方法

今回、教科書評価を行う際に、外国語の指導の領域として、書くこと(Writing)を選んだ理由を述べる。まず、第1に、英文を書くことは、高学年で開始され、中学・高校・大学・社会で今後ますます求められる技能(Skill)であること。第2に、英文を書くには、聞いたり読んだりした情報を活用し、適切な単語を選択し、語順に注意し、内容を吟味しながら書くという4技能(聞く・話す・読む・書く)の中で難易度の高いものであること。第3に、学習者に英文を書いてもらうと、その学習者の文法力・語彙力・英文構成力等がわかり、学習の支援を行うとき、大変有益な情報を英文は提供してくれるからである。

次に、教科書評価を行う理由について述べる。今回学習指導要領や、研修ガイドブックを再点検したが、書くことの指導に関して、まだはっきりしない記述もあり、小学校の書くことの指導をする際の具体的な留意点を知るのに、教科書を比較し評価することが大変役に立つと考えたからである。

さらに、教科書を点検すると、コアカリキュラムや研修ガイドブックで強調されていること、日本の外国語（英語）教育の指針となり、法的拘束力のある学習指導要領で強調されていること、さらに、どのような教授理論に基づき「外国語」の教科書が執筆されたのかといった多くの情報を教科書は提供してくれるからである。

現在出版されている外国語の教科書は、7冊（5・6年で14冊）あり、その中から付属のCDや教師用指導書の入手可能性と、ある自治体の教科書の採択率、さらに、児童が中学生になっても、同じ教科書出版会社の教科書を入手することができるかどうか確認し、以下の6冊の教科書を選定し、教科書評価を行った。評価の観点としては、第1に、文字表記、第2に書くことの指導の流れ、第3に文法の取り扱いについて比較調査した。この調査を実施すれば、それぞれの教科書の特徴や長所や課題も見えてくるはずである。なお、使用する教科書は、以下のように略して引用することにする。今回評価する教科書には移行期の教科書も含まれているが、その理由は現在出版されている文部科学省の検定を経た小学校外国語の教科書は、この移行期の教科書をベースにしたものが多いからである。

#### 【評価する教科書】

1. *We Can!* ① & ②（移行期の教科書）5年生用、6年生用それぞれWC1, WC2とする。
2. *New Horizon Elementary English Course* ⑤ & ⑥ をNH5, NH6とする。  
付属辞書：*Picture Dictionary, New Horizon Elementary English Course*
3. *One World Smiles* ⑤ & ⑥ をOWS 5, OWS 6とする。

## 結果と考察

### 1. 文字表記

小学校において英語で書くことの指導を行う際の留意点の一つが「文字の表記」である。本稿では、ローマ字表記とアルファベット表記に焦点をあてる。

#### ローマ字表記

まず、ローマ字表記について見ていくことにする。WC1の81ページには、ローマ字表があり、ヘボン式を中心に、訓令式が（ ）で示されている（文部科, 2018a）。NH5の85ページもWC1と同じように提示されている（アレン玉井ら, 2020a）。

ヘボン式とは、今日パスポート等に記載されている表記であり、例えば、「し・ち・つ・ふ・じ・ちゃ・ちゅ・ちょ」は

それぞれ、shi, chi, tsu, fu, ji, cha, chu, choとなる。それに対して、訓令式では、si, ti, tu, hu, zi, tya, tyu, tyoと表記する。

今日、ローマ字表記は、ヘボン式が主流であるが、従来の国語教育では、訓令式を用いてきたため、日本では、両方の表記が書類やメールアドレス上では見られる。さらに、最近児童が使用している国語の教科書の3年生用と6年生用を比較してみたが、共にローマ字は、訓令式が今なお使用されているものもあった。それに対し、OWS 5では、工夫が見られる（金森ら, 2020a, 巻末②）。ローマ字表記自体は、ヘボン式であるが、ヘボン式のローマ字表が4本線と共に記され、児童が実際にローマ字や、英文を書くとき、文字の高さで悩むことなく書けるため、合理的で効率も良く、誤表記を避けることができる。従って児童がローマ字表記を勉強するには、OWS 5の使用を推薦する。

#### アルファベット表記

次に、アルファベット表記について見ていく。WC1の80ページでは、アルファベットの太文字と小文字が併記され、その下の段に文字がなぞれる（tracing）ようになっている（文部科学省, 2018a）。文字は、大きく4線上に記されている。それに加え、NH 5の86ページ以降では、文字サイズは大きく、大文字・小文字の書き順も数字と矢印で示され、文字を書くときの注意点も併記されているため、児童は確認しながら、アルファベットを書く練習ができる（アレン玉井ら, 2020a）。一方、OWS5 (p.33)の文字と書き順の表記は小さめであり、大文字と小文字の学習は、各課少しずつ進んでいく構成となっている（金森ら, 2020a）。このように見てくると、英単語や英文を書くのに、NH5は大変優れていると言える。

### 2. 書くことの指導

それでは、上記6冊の教科書では、書くことの指導がどのような流れで展開されているのか、各教科書を点検し、比較する。

#### 1) *We Can!* ① & ②（文部科学省, 2018a, 2018b）

まず、文部科学省が著作権を有する*We Can!*の①と②であるが、特にWC2では、音声教材の後に続いて英語の発音を繰り返し、その後英語の例文を書き写す（copying）タスクが用いられている。

#### 2) *New Horizon Elementary English Course* ⑤ & ⑥

（アレン玉井ら, 2020a, 2020b）

次にNH6では、各課のテーマのまとめとして、基本英文を読み、その英文をお手本にして、自分自身を主語にして、あるいは自分を主体とした英文を書くという指導法が用いられている。そのテーマは、自己紹介文・自分の生活・旅先

案内・夏休みの思い出・食物連鎖・食生活などであり、児童にとって比較的身近なテーマについて短い文を書き、ペアやグループで話し合ったり、皆の前で発表し合ったりする構成となっている。このように児童は目的をもって英文を書き、対話し、発表し、その後原稿は、台紙に貼り付けることになり、1年間の学びが終了するころには、ポートフォリオも完成する。注目すべきことは、従来の英作文の授業と異なり、英文を書いて終わりではなく、目的を持って書き、コミュニケーションの時活用し、学習成果を自分で管理できるようにになっていることである。これは、注目に値する。この教科書を使いこなすには、教員養成課程の学生は、書くこと (Writing) の指導と評価について今以上に詳しく学ぶ必要がある。

### 3) One World Smiles ⑤&⑥ (金森ら, 2020a, 2020b)

ここでは、One World Smiles ⑥ の書くことの指導の流れを見ていくことにする。巻末①でまず、アルファベットの大文字小文字が併記され、次に英語を書く時のルールが提示されている。例えば、文頭や固有名詞の大文字表記や文末にピリオドをつけること、語と語の間を一文字 (1 stroke・半角) 空ける等等、英文を書く基本が記されている。これらのことは、当たり前のように思われるかもしれないが、英語を初めて学ぶ児童にとっては、大切なことである。なぜなら、日本語は、ひらがな・カタカナ・漢字を使用するため、文字と文字の間をあける「分かち書き」をしなくても判読は可能であるが、英語の場合、分かち書きをしないと、英文の判読が困難になるからである。また、児童の将来を考えると、グローバル化した社会において、英語で自分の意志や考えや研究結果を文字で表現する際に、基本をしっかりマスターしていることは、きわめて大切なことであり、上記の提示方法は理にかなっている。

さて、Writingに至る活動に入る前に、OWS6の第1課の構成を確認すると、テーマは、“Let’s be friends”で、①映像を見て、考え、英語を聞いてわかったことを線で結ぶ活動。次に、②英語を聞いて人物と科目名と好きなスポーツを結びつける活動、そして③ペアワークで自分の好きなもの、できること、誕生日を伝え合う活動等となっており、その後、④各自が自己紹介シートに英語で書くことになっている。最後に、⑤自己紹介シートを使ってクラスメートとお互いに自己紹介をし、わかったことをメモするという構成になっている。この1連の活動をまとめてみると、目と耳からの情報を理解し、その情報を活用して、自分のことをペアワークで伝え、その後、英文を書き、クラスメートに伝え合い、メモをとるという構成になっている。

さて、第2課以降も授業の大きな流れは、第1課と同じであり、目次の内容は、We Can ②とほぼ同じテーマとなっ

ている (文部科学省, 2018b)。すなわち、自己紹介・私の町・日本へようこそ・私の夏休み・行きたい国・オリンピック・パラリンピック・私の小学校の思い出・将来の夢・中学校での生活である。

以上3種類の教科書を比較し、書くことの指導の流れを点検した。これらの教科書の共通点は、書くこと (Writing) も耳から英語をインプットし、その内容を理解し、その情報を活用し、ペアワークやグループワークで伝え合い、最後にクラスメートの前で発表するために、英文を書くことである。

この一連の流れは、「外国語」の学習指導要領に書かれていることであり (文部科学省, 2017a)、また、聞くこと・読むことを通してのインプット → ペアワーク・グループワーク → クラス全体に報告することは、コミュニケーションを重視したCLT (Communicative Language Teaching) という指導法ではよく使用されるコミュニケーション活動の一連の流れであり、日本では、1989年 (平成元年) から、中学と高校で活用されている英語教授法でもある。ペアワーク・グループワークの後、クラス全体に報告すると、児童と教員間で情報の共有が可能となり、児童は、お互いに学ぶことができるため、望ましい授業の流れであると言える。

課題は、入門期故に児童の英語の語彙が限られることである。そのため、発表中はジェスチャーや写真・カードも活用し、表現力の不足を補うことが大切であろう。なるほど、児童の語彙力を高めるため、英語を聞くことと使うことは大切であるが、音を認識し、意味も分かり、今後使い続けるためには、どうしても英単語を書いて覚えていく必要がある。それでは、日本の児童にとって、英語の単語はどのように覚えていけば効率が良いか確認していく。

## 3. 文法

### 1) 語順・人称・時制

従来の中学英語と高校英語では、文法中心に学習が展開されてきた。コミュニケーション活動においても使える文法事項を活用し、実施可能な状況や機能 (言語の働き) を考え、教科書が構成されていた。それ故に、教員は必要に応じて文法説明をすれば、授業は進展していった。

ところが、小学校の外国語 (英語) では、状況が異なるのである。すなわち、小学校では、英文法は、はっきりとは教えず、児童の気づきを大切にするのである (文部科学省, 2017a, p.170)。実際、語順、3人称、動詞の過去形は、小学校6年生になって初めて登場する。では、具体的に見ていくことにする。

OWS6では、第4課の夏休みの思い出で、日本語と英語の語順の違いに言及し (金森ら, 2020b, p.51)、第7課の

オリンピック・パラリンピックのスポーツ選手の紹介のところで、3人称のHe, Sheが初めて登場する。それに対し、WC2では、第3課の人物紹介で3人称が出てくる。例 He is famous. She is great. このように、3人称のHe, Sheの登場する時期に違いがある。第7課の「小学校生活・思い出」で初めて、過去形が登場する。しかし使用された過去形は、was, saw, ate, enjoyed, went等、限定されている。また、第7課には、短い手紙を書く課題があり、第8課では、将来の夢を5行程度の英文で書く課題がある。第9課になると、中学校でしたいことを、6行程度の英文で書く課題がある。

このように書くことの観点から教科書を比較してみると、英語を書くことも、英文を書き写す課題から始まり、語順への気づき、3人称、過去形の学習と従来の中学校の英語教育と異なり、文法がゆっくりとほんの少しずつ提示され、課題(タスク)が少しずつ、難しくなっているのがわかる。

#### 4. 文法の取り扱い

上述したように、小学校の外国語の授業では、文法説明は、はっきりとは行わず、児童が学習の中で気づくことを大切にしているのがわかる。それは、小学校学習指導要領外国語科の2 内容 (p.156)や研修ガイドブックにも記されている(文部科学省, 2017a, 2017b)。

このアプローチでは、児童に気づきを促す工夫が必要になる。優れている提示方法例として、WC2の3課に以下のような例文がある(文部科学省, 2018b, p.23)。

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. I play the violin.</li> <li>2. My violin is old.</li> <li>3. I want a new violin.</li> <li>4. I eat fish.</li> <li>5. I like fish.</li> <li>6. I want fresh fish.</li> </ol> |
|--|

以上の英文は、映像を見て、自己紹介文の内容について考えるタスク(課題)になっているが、いちいち主語、動詞、冠詞、形容詞、名詞と言わなくても英文をじっくり見ると、児童は、英語の肯定文の語順に気づき、名詞を変えれば、自分のことを英語で話すこともでき、その後、英文を書くことも可能となる。この本の提示方法は、文の構造を児童に意識させるのに良く、さらに、単語の意味がすぐ浮かばない児童も考慮し、英文中に、play, want, eat, likeといった動詞、violin, fishといった名詞には、イラストがついていて、「児童にやさしい」工夫がなされている。

他にも、語順の気づきを与えるアイデアは従来からある。例えば、品詞を色分けし提示する。単語シートの裏にマグネットを貼り付け黒板にはり、語順が変わると単語シートの位置を交換するとか、紙とはさみを使用し英文を書き、品詞ごとに切り離し英文の再構成を行う等である。

#### 総合考察

以上、ローマ字表記・アルファベット表記・書くことの指導について、3種類の教科書間の比較を行ってきた。小学校学習指導要領(外国語活動・外国語)では、小学校中学年では、聞くことと話すことが中心で、読み書きを含めた技能(Skills)は、5・6年生になって学ぶものであり、書くことは、活字体の大文字・小文字を書く活動や、音声で十分に慣れ親しんだ語句や基本的な表現を書き写す活動、さらに、それらを用いて例文の中から言葉を選んで書く活動と限定されている(文部科学省, 2017a, p.158)。児童の立場に立って考えてみると、耳からのインプット、すなわち、音源から英語をまず聞き、内容を理解し、英語を書き写し、その後、英文を書くという一連の学習は、英語の発音を聞いて真似のできる児童にとっては、良いアプローチであるが、どちらかというと、目で見て確認し、覚える児童、すなわち、視覚型学習者の場合、学び始めは戸惑いや不安が生じる可能性がある。なぜなら児童用の教科書は、一見「ワークシート」のようであり、児童が「外国語」の授業の中で学びわかったことを、一部は英語で、残りは日本で記すか、線で関連性のあるものを結びつける活動が中心になるからである。児童がイラストや写真の多いワークシートのような教科書を持ち帰り、わが子が学んだことをうまく書けず空白の多い教科書を見た家族の方は、驚かれるであろう。そうならないためにも、小学校教員の児童への学習支援や励まし、工夫をこらした補助教材の作成が必要になると思われる。それには、まず、児童のニーズに合った検定済教科書の選定が大変重要になる。今回の教科書評価では、内容の充実した教科書を選定したが、その理由は、書き込み式の教科書であっても、教科書の内容そのものが豊かであれば、児童は教科書そのものから学べることが多いからである。また、教員の側から見ると、教科書が良くできていれば、補助教材作成の時間や労力も軽減されるからである。

次に、小学校教員の立場に立って考えてみると、ご自身が学んでこられた英語の指導法と現在の外国語の指導法は異なり、とにかく耳からのインプットが大切であることを考えると、CDやVIDEOの使用のみならず、ALT(英語指導助手)の方の不在時には、先生方ご自身の発音や発音指導も大事になってくる。そのために、小学校教員養成課程にお

いて学生は英語そのものに関する知識を深め、指導技術が向上できるよう、通常の講義と演習に加え、4技能を一層向上させることが必要である。以下は、著者の提案である。

現在、教員養成課程の科目の①「外国語」と②「外国語の指導法」は、必修科目となっており、両者は密接に関連している。そのため、両科目を関連づけて、①で基礎固めとして書く活動をもっと積極的に取り入れていくことを提案する。例えば、今日話題となっている「環境問題」で英文を書く活動を考えてみよう。

**Step 1:** 授業中10分間で英文を書き、クラスで発表する。  
聴衆(クラス全体)は、発表を聞いて気づいた点を、事前に配布された評価表に記入する。

**Step 2:** その後、宿題として、5行程度の英文にまとめ、英文を教員へメール送信する。教員は、内容を点検し、加筆・修正・助言を含むフィードバックを学生へメール送信する。

**Step 3:** 学生は、フィードバックを参考にし、発表原稿の修正を行い、発表に備え、発音・強調点・アイコンタクトを意識し、練習する。

**Step 4:** 授業中、発表を聞き、本人は自評を、聴衆はスピーチ評価表を使って、評価する。

(説明と指導上の留意点)

この一連の活動で使用するスキルは、書くこと、話すこと、聞くこと、読むことの4技能をカバーし、学生の即興的な英語発信力の向上を目指し、準備した英文原稿を活用して発表を行い、英語発信力に磨きをかけることも期待される。本活動は、短時間に英文を書く力、及び、自分で書いた英文を点検し、評価する力の向上にも役立つ。具体的には、語彙力・表現力・発音の向上と共に、簡潔で、わかりやすい英文を書く力の向上と句読法(Punctuation)の習熟、自分の書く英文の強みと課題を知り、その後の学習や教育に活かすこともできる。この活動は一部実施済みであり、学生は5分間ではあるが、与えられた時間と機会を最大限活用し、中身の濃い、テーマに沿った専門用語も使用し、立派な英語による発表をしてくれたことを報告する。

## 結論

今回の一連の調査の結果、小学校の外国語の書くことの学習は、耳からの情報のインプットから始まり、内容を理解し、ペアやグループで意見交換をし、その後得た情報と語彙を使って初歩的な英文を書くという授業形態がメインになる。種々の調査の結果、見えてきたのは、児童の英

語を聞き話す技術と基本的な語彙力は、向上すると思われるが、英文を書く技能の向上は十分ではなく、小学校の「外国語」での基礎固めをしっかり行い、小学校と中学校の書くことの学習の橋渡しと弱点補強を十分に行い、中学校での書くことへの指導へと繋げていくことが求められる。

幸い、現在入手可能な中学校の外国語の教科書では、題材も文法も言語活動も充実し、中学1年生が自信を持って英語の4技能を向上していけるよう、教科書各課において配慮と工夫がなされている。そこで、小学校教員は外国語の教科書の内容の継続としての小中連携を常に考え、児童が楽しく英語を身につけていけるよう支援していくことが求められる。

小学校教員を目指す学生は、児童が耳から十分な英語のインプットを得て、内容を理解し、それらを使って初歩的な英文が書けるよう、CDだけでなく、まず自らの英語の発音を矯正し、児童の発音の指導と児童の英語の4技能が向上できるよう指導技術を一層身につける必要がある。さらに、児童の発達段階と学習段階を考慮し、効果的な学習指導ができるよう授業実践と振り返りを何度も行い、自身の英語力の向上に努め、よりよい学習支援ができるよう最善を尽くすことが求められる。

## 参考文献

- アレン玉井光江・阿野幸一・濱中紀子ら(2020a): *New Horizon Elementary English Course* ⑤. 東京書籍, 東京, 1-96.
- アレン玉井光江・阿野幸一・濱中紀子ら(2020b): *New Horizon Elementary English Course* ⑥. 東京書籍, 東京, 1-96.
- 金森強・本多敏幸・松本茂ら(2020a): *One World Smiles* ⑤. 教育出版, 東京, 1-118.
- 金森強・本多敏幸・松本茂ら(2020b): *One World Smiles* ⑥. 教育出版, 東京, 1-112.
- 東京学芸大学(2017): 「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成28年度報告書, 1-192 (コアカリキュラムに関する資料).
- 文部科学省(2017a): 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編. 開隆堂, 東京, 1-205.
- 文部科学省(2017b): 小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック. 旺文社, 東京, 1-223.
- 文部科学省(2018a): *We Can!* ①. 東京書籍, 東京, 1-96.
- 文部科学省(2018b): *We Can!* ②. 東京書籍, 東京, 1-96.

## What Does Textbook Evaluation of Foreign Language Teaching, Teaching Writing in Particular, in Elementary School Tell Us?

Reiko IGUSA

School of Childcare and Early Childhood Education, Tokyo University  
and Graduate School of Social Welfare (Ikebukuro Campus),  
2-47-8 Minami-ikebukuro, Toshima-ku, Tokyo 171-0022, Japan

**Abstract :** In April 2020, Foreign Language Activity for third and fourth-year students and Foreign Language for fifth and sixth-year students started in elementary school all over Japan. New educational curriculum of foreign language was introduced in Junior High School in 2021 and will start in Senior High School in 2022. Thus, English education in Japan has shown remarkable progress. What should teachers do in order to surf the big waves and keep going? One of the cues is textbook evaluation, so six textbooks for fifth and sixth-year students were evaluated, focusing on teaching Writing. One of the findings is learning support for the students. In order to identify the learners' needs and support them, pre-service teachers need to brush up their English and improve their teaching techniques.

(Reprint request should be sent to Reiko Igusa)

**Key words :** Foreign language, Teaching writing, Textbook evaluation, Pre-service teacher training